

トレド聖堂参事会図書館蔵『千家詩』(万曆刊本残卷)について

井上泰山

一 はじめに

勤務する大学によって平成十七年度前期在外研究員の資格を与えられた筆者は、昨年九月初旬、スペイン中部の都市トレドに赴き、大聖堂に付設されている参事会図書館 (ARCHIVO Y BIBLIOTECA CAPITULARES) の蔵書を調査する機会に恵まれた。当該図書館の蔵書全般に関しては、本稿とは別に「トレド聖堂参事会図書館の蔵書について」と題する一文を草し、十八年度中に『関西大学文学論集』に掲載する予定であるのでそちらをご覧いただくとして、ここでは専ら、当該図書館に保管されている六種類の漢籍のうち、明の万曆二年に刊行された『千家詩』の古版本(以下、トレド本『千家詩』と呼ぶ)に関する調査結果を報告し、以て該書の学術的価値を見定めようとするものである。

本題に入る前に、『千家詩』についての基本的事項を幾つか確認しておきたい。従来の認識によれば、『千家詩』は、南宋の劉克莊が編纂した『分門纂類唐宋時賢千家詩選』所収の詩を基本として抜粋した上で、新たに一定の詩を加え、初学者のための平易な注釈を加えた啓蒙書であるとされる。また、版本としては二つの系統があり、南宋末年に謝枋得が七言の絶句・律詩を選定して

注釈を施した二卷本、及び、清代に王相が五言の絶句と律詩を新たに加えて補注を施した四卷本が知られている。つまり、『千家詩』は元来、『三字經』や『百家姓』『千字文』などと並んで、初歩的な識字教育を兼ねた名詩鑑賞用の啓蒙書として編纂され、はじめ七言詩のみを収録していたが、清代になって新たに五言詩を加えて増補したものも現れたのである。ところが、今回の調査によって、トレド本『千家詩』はそのいずれとも異なる体裁を備えた特異な版本であることが判明した。該書を精査することによって、『千家詩』に対して新たな認識を加えることができるものと思われる。

ところで、トレド本『千家詩』の存在自体は、実は以前から知られていた。今から五十年余り前の一九五二年、台湾の学者方豪がイベリア半島に漢籍調査のため訪れた際、スペインのトレドにも調査の手を伸ばし、聖堂参事会図書館で漢籍を閲覧した記録が残されているからである。「スペイン・ポルトガルに流入した中国の文献(原題: 流落於西葡的中国文献)」と題する調査報告(『方豪六十自定稿』下巻所収)によれば、五二年六月十四日午後二時過ぎ、施正祥とともに当該図書館に入館した方豪は、一八〇八年に編纂された抄本による目録に目を通し、未整理のまま放置されていた十種類の漢籍を閲覧して簡単なメモを残した。その中

書影① (トレド本『千家詩』三卷首葉)



書影② (トレド本『千家詩集』四卷末葉)



には本稿で取り上げる『千家詩』に関する記述も含まれており、「明刻本、四卷。」の案文に続いて、「新刊明解増和千家詩集、宋名賢謝疊山註、王氏廣勤堂梓」と記されている。この記述内容から考えると、方豪がメモを取ったのは該書の第三卷第一葉冒頭の三行（書影①参照）であると思われるが、あるいは匆忙の間に記録したためであろうか、原文に無い「集」の一字を誤って付加している。後述するように、トレド本『千家詩』は三卷と四卷では名称が異なり、三卷のそれは『千家詩集』ではなく『千家詩』である。保存状態が極めて悪く、錯簡の甚だしい該書については、全体を詳しく閲覧することもせず、偶々目に留まった冒頭の刊記のみを抄録したものであろう。それはともかく、トレド本『千家詩』の存在は氏によって半世紀も前に報告されていたながら、様々な物理的条件に阻まれ、今日に至るまで、その詳しい実態は明らかにされていないのである。

二 トレド本『千家詩』の保存状態及び書誌について

はじめにトレド本『千家詩』の現況について、その輪郭を報告しておくことにする。先ず、書名について。該書は本来四卷本であったと思われるが、現存するのは三卷と四卷のみであり、各巻の冒頭と末尾に、書名に関する刊記がある。「新刊明解増和千家詩三卷」「新刊明釈義解註千家詩三卷終」「新刊明解増和千家詩集四卷」「新刊明解増和千家詩集四卷終」などがそれぞれあり、「千家詩」と「千家詩集」の二種類が混在している。これは、各巻が元來分冊の形で刊行されたことに起因すると思われるが、後述する別の版本との区別を明確にするために、本稿ではトレド本に対し

て「千家詩」の呼称を用いることにする。刊年は万曆二（一五七四）年。これについては、四巻の末尾二行にわたって、「万曆甲戌年冬月／金陵王前塘刊行」の十四文字が刻されていることにより確定できる（書影②参照）。「金陵」は現在の南京、「王前塘」は刊行者の名前であり、三巻の第一葉三行目にも「王氏廣勤堂梓」とあるから、書肆の名は「廣勤堂」であることが知られる。また、各巻初葉第二行目には、注釈者が宋の謝枋得であることを示す「宋名賢謝疊山註」の七文字がある。

次に、書物の体裁について述べる。原本は線装本で、縦二四センチ、横十五センチ。表紙は表・裏ともに破損して無く、別の紙で代用している。現存する本文は二二葉であるが、うち一葉に重複が認められるため、実際の有効葉数は二一葉ということになる。書物全体に夥しい乱丁が認められる他、天地が逆に綴じられたものもあり、殆ど原様を留めていない。各葉とも相当に破損が進んでおり、修復するため、原葉を半葉づつ切り離し、別の台紙に張り直した後、それらを順不同に綴じた結果生じた現象であると思われる。従って、既述の寸法はあくまでも推定によるものであり、正確な実寸ではない。

書誌に関して更に補足すれば、現存二二葉全て、上下に合刻されており、下部に「詩」の原文と「釈義」、上部三分の一に「増和詩」と「図版」を載せる。収載されている「詩」は全て七言律詩であり、「春景」「夏景」「秋景」「冬景」のように、四季の区分に従って関連する詩を収めている。下部は、毎半葉九行、一行十四字で、「詩」の原文は一行に二句づつ、合計四行にわたって刻されている。「釈義」は小字で双行に刻され、一行十六字から十八字と、一定しない。また、上部の「増和詩」は一句づつ八行にわたって刻されており、「図版」の右側には時折、「賈至朝帝」

「上元遊賞」「嘆思故人」など、漢字四文字の説明書きが添えられている。「図版」の数は全部で三六枚。うち、漢字の説明書きがあるのは七枚のみであるから、それ以外の二九枚の「図版」には説明書きが無いことになる。

三 北京図書館蔵『明解増和千家詩註』（抄本）について

右に紹介したように、トレド本『千家詩』は、残本であることが惜しまれるものの、その刊行が明の万曆二（一五七四）年と、現存する『千家詩』の版本としては格段に古く、極めて貴重な版本であることは疑いない。ただ、既述の如く、原葉の破損が著しい上に、修復の際に順番を考慮することなく綴じられたために、殆ど原様を留めない程の錯簡が認められ、調査した時点の印象では、復元に相当な困難を伴うことが懸念された。

ところが幸いにも、帰国後の継続調査の過程で、北京図書館所蔵の貴重書の中に、万曆年間に抄写されたと思しき『明解増和千家詩註』と題する彩色図版入りの書物（一九九八年十二月、北京図書館出版社。以下、北京本『千家詩註』と呼ぶ）が一部残されているとの情報を得た。早速当該書物入手してトレド本『千家詩』と丹念に比較してみた結果、装幀や版式こそ全く異なるものの、収載詩や「釈義」の文面、更には「増和詩」までも殆ど同一であり、両書は極めて密接な関係にあることが明らかになった。従って、北京本『千家詩』と逐一对照することにより、トレド本『千家詩』の原様をほぼ完全に復元することが可能となるのである。

ここで、北京本『千家詩註』について、その概要を紹介してお

く。この点に関しては、該書に李致忠氏による「跋」が付されているので、それをも参照しつつ、要点をかいつまんで示しておくことにする。まず、北京本『千家詩註』について特に際だっている点は、その封面に豪華な「黄綾紙」が使用され、本文にも極めて高価な「加厚皮紙」が用いられていることである。また、上部の「図版」は全て天然素材の顔料による七色の彩色図であり、版匡・界行・魚尾は全て朱筆されている。つまり、北京本『千家詩註』は宮廷内で皇族の子弟教育を目的として特別に制作されたものであり、民間の通行本とは全く様相を異にする超豪華版なのである。

書誌についても簡単に触れておこう。北京本『千家詩註』には抄写時期を示す記述は無い。現存するのは第二巻のみであるが、収載詩はトレド本『千家詩』と全く同一であり、現存葉数は全体で二四葉。つまり、北京本はトレド本の三巻と四巻を統合して全体を一つの巻に収めたに過ぎず、内容的には殆ど同じものである。収載詩の総数は三六首。上図下文の形式に拠り、上部に「図版」と「増和詩」、下部に原詩と「釈義」を載せる点もトレド本『千家詩』と同じである。ただ、版式が微妙に異なるため、全体の葉数がトレド本のそれよりも二葉多くなっている。また、「図版」の数も、トレド本に比して十二枚多く、毎半葉の上部に必ず一枚、極彩色の「図版」が付いている。つまり、三六首の詩全てについて、一枚ないし二枚の「図版」が添えられているのである。版式は毎半葉九行で、一行十五字、「釈義」の部分は双行にわたる小字が十二字から十四字の範囲で抄出されている。ただし、四文字の漢字による「図版」の説明書きは、トレド本『千家詩』と同じく七枚にしか付されておらず、そのうちの一つだけに文字の出入りが認められる。

北京本『千家詩註』の概要はほぼ右の如くである。それは確かに他に類を見ない豪華本ではあるが、肝心な点は、そこに収載されている七言詩や「釈義」及び「増和詩」が、細かな字句の異同を除いてトレド本『千家詩』のそれと殆ど同一であり、両者が同一系統の書物であることがはっきりと確認できる点である。この点を確認した上で、次章において、トレド本『千家詩』所収詩の復元を試みる。

四 トレド本『千家詩』の復元

ここでは先ず、北京本『千家詩註』との比較によって、トレド本『千家詩』に登載されている詩題と作者を元来の順番に復元し、一覧表にして示しておくことにする。番号は便宜上筆者が付したものである。本文の上部に「図版」がある場合には「図」の文字を付した。また、○印は本文の上部に「増和詩」が有り、×印はそれが無いことを示している。

【三巻】

- 「春景」1 奉和賈至舍人早朝大明宮・杜子美「図」○／2 答丁元珍・歐陽永叔○／3 上元・蔡君謨「図」○／4 上元應制・王禹玉「図」○／5 插花吟・邵康節○／6 寓意・晏同叔「図」×／7 寒食書事・趙元鎮○／8 清明・黃山谷○／9 清明日・高菊圃「図」×／10 郊行即事・程明道○／11 鞦韆・洪覺範×／12 曲江・杜子美○／13 其二・前賢○／14 旅懷・崔塗○／15 答李儋・韋蘇州○
- 「夏景」16 江村・杜子美○／17 夏日・張文潛○／18 輞川積雨・王摩詰○／19 新竹・黃山谷○／20 表兄話舊・竇叔向○

【四卷】

「秋景」21 偶成・程明道○／22 遊月陂・前賢○／23 中秋月・李朴○／24 新秋・杜工部○／25 與朱山人・杜子美○／26 秋思・陸放翁○／27 月夜舟中・戴石屏「圖」○／28 九日藍田會飲崔氏庄・杜工部○／29 聞笛・劉後村○／30 長安秋望・趙嘏○

「冬景」31 初冬・劉後村「圖」×／32 冬至・杜子美○／33 梅花・林和靖○／34 自詠・韓文公○／35 干戈・王中○／36 時世行・杜荀鶴○

トレド本『千家詩』の構成は元来右のような体裁であったと推定される。ここでもう一度整理してみると、三卷に「春景」十五首及び「夏景」五首の二十首を、また、四卷に「秋景」十首「冬景」六首の、合計三十六首を収載していた。そのうち、「増和詩」のあるものは三三首、残る四首については原詩のみ存在し、「増和詩」は付されていない。

北京本に拠って推定した結果、トレド本『千家詩』には「春景」の一部に落丁があることが判明した。乃ち、右のうち、10の「郊行即事」の原詩及び「増和詩」ともに、前半の四句のみ現存し、以下は欠落している。また、11の「鞦韆」は全体が欠落、12の「曲江」も、原詩・「増和詩」ともに後半の四句が現存するのみである。以上の欠落部分について版式を勘案した上で復元すると、トレド本『千家詩』には一葉分の落丁があることが判明する。従って、全体は重複葉を含めて元来二三葉で構成されていたことになる。

五 トレド本『千家詩』の特徴

復元作業を終えた後に必要となるのは、トレド本『千家詩』の内容を細部にわたって検討し、その特徴を明らかにすることである。それによって、先述の北京本『千家詩註』との関係もより一層明確になり、両書の版本史上の位地も確定されるであろう。しかし、遺憾ながら、現段階では、その点について十分な報告を行うまでには準備が進んでいない。現在、トレド本『千家詩』の原様を北京本のそれと比較し、データベース化することを試みつつあるが、坊刻に係ると思しき該書には誤字脱字の類が頻出する他、既に破損している部分もあり、精確なデータベースを作成するにはかなりの時間を要する。ここでは、未熟な段階ながらも、翻刻作業を進める過程で気付いた点を幾つか取り上げ、該書の特徴をとらえるための一つの資料として提示しておくことにする。

第一に、トレド本は北京本に較べて全体がかなり粗雑な作りであり、刻された字体も民間で通用される略体が至るところに用いられている。幾つか例を挙げるならば、「露」を「路」に、「殿」を「展」に、「池」を「也」に、「城」を「成」に、「弦」を「玄」に作るなど、偏旁を省略して刻する例が見られる。この点については、嘉靖年間の坊刻に係ると思しき白話短編小説集『六十家小説』の残本などと似通った傾向を指摘することができる。また、「悠」を「然」に、「正」を「止」に、「東」を「東」に作るなど、魯魚の誤りも夥しく認められる。こうした点から見て、トレド本『千家詩』は北京本『千家詩註』のように宮廷内での教育を目的として編纂されたものではなく、識字と鑑賞を兼ねた啓蒙書として民間で刊行され流布していたものと考えられる。

第二点として、「図版」についても同様の傾向が指摘できる。既述の如く、トレド本『千家詩』の「図版」は北京本『千家詩註』のそれに較べて十二枚少ない。図柄も単純素朴なものばかりであり、登場人物は少なく、背景の設定も似通ったものばかりで変化に乏しい。モノクロである上に描写のタッチも粗く、極彩色の図版が添えられた北京本と比較すると、いかにも見劣りがするのは事実である。ただ、トレド本『千家詩』の「図版」の中には、水面に浮かぶ「篷船」、すなわち「とま船」を描いたものが数枚あり、江南特有の風景を想わせる。この点は恐らく、該書が南京で刊行された事と密接に関係するであろう。

六 残された問題

以上、トレド聖堂参事会図書館所蔵の万暦刊本『千家詩』について、筆者自身の調査に基づき、その概要を報告した。トレド本『千家詩』は、従来知られていた版本と較べると、巻数表示に特異な点が認められる他、図版の様態、刻字の特徴などから見て、明代坊刻本の特徴を備えており、恐らくは学界未見に係る極めて貴重な資料であると思われる。該書のもつ版本史上の価値は決して小さくないと考えられるが、今後更に明らかにすべき点として、北京本『千家詩註』との関係が挙げられる。既述の如く、北京本の解説によれば、それは張居正が明代末期に太子・朱翊鉤を教育するためのテキストとして作成した所謂「太子読本」であるとされるが、果たして実際にそうであるのか。北京本『千家詩註』に抄写年代が明記されていない以上、現時点ではあくまでも推測の域を出ない。今後更に検討を重ねる必要があるだろう。

また、更に重要な点として、トレド本『千家詩』と北京本『千

家詩註』は、内容的に極めて似通っていることは既に述べた通りであるが、両者は一体どのような関係にあるのか。いずれか一方が他方に依拠して作成されたのか、それとも、両者の他に「祖本」とも言うべき別の版本の存在を想定すべきなのか。疑問は深まるばかりである。今後両者の細部を比較検討する過程で、こうした幾つかの疑問に対する解決の糸口を見いだせる日が来ることを望みたい。

(関西大学文学部教授・中国文学)

〔50頁より続く〕

(11) 『風雅集』諸本については、国文学研究資料館所蔵の紙焼写真で調査したが、京都府立総合資料館蔵本については実見することができず、岩佐美代子『風雅集注釈』校異によった。

*本文の調査は、『新編国歌大観』CD-ROM版によった。

(横浜国立大学非常勤講師・国文学)